



作品の前に意見を交換する



ソーシャルディスタンスを保つためのコミュニケーションワークショップ



作家の話を聞き、制作プロセスを知る



演劇の手法を使った講座の様子



展覧会の関連企画を企画し、開催する

# SCARTSアートコミュニケーター「ひらく」

SCARTSアートコミュニケーター「ひらく」は、市民とアートのつなぎ手として活動しているチームです。

展覧会での鑑賞プログラムやワークショップの企画運営、ウェブを使った情報発信など、その時々で方法を変えながら、アーティストや専門家も巻き込んで多様な活動を行っています。

一般市民からひろく募集されるアートコミュニケーターは、年齢も職業もさまざま。多様なバックグラウンドを持った仲間たちが集まります。彼らは3年間の任期の間に、共に講座を受け、勉強会を行ったり、意見を出しあったりしながら企画を組み立てて実行し、活動を深めています。

「ひらく」の活動を通じて生まれるのは、アートと市民との関わりだけではありません。アートを介した人と人との関係や居場所、活動を通じて形づくられるネットワークなど、幅広いものがあります。多様なメンバーがフラットに意見を交換し、ものごとをつくっていく「創造的なコミュニケーションの場」での経験は、任期を終えた後のそれぞれの活動につながっていきます。

SCARTSでは、市民の創造的な活動を支援し、長期的な活動を通して地域コミュニティの形成と活性化につなげ、新しい芸術文化と市民との関わり合い方をデザインすることを意図し、SCARTSアートコミュニケーターの活動を進めています。

## 「ひらく」の由来

SCARTSアートコミュニケーターの活動は、交流プラザ開館前の2018年8月から始まりました。当時は愛称はありませんでしたが、活動を続ける中で、「自分たちの活動をあらかず親しみやすい名前がほしい!」という声があがり、みんなで案を持ち寄り、話し合って決めた名前が「ひらく」です。

「ひらく」という言葉には、未来に向かって動いていくイメージがあります。

アートを通して人の心を開くこと、  
そのための方法を共に切りひらき、  
互いに啓きあうこと

それが、SCARTS アートコミュニケーター「ひらく」の活動です。





# SCARTSアートコミュニケーター 「ひらく」の活動

## 鑑賞サポートプログラムの実施

SCARTSで開催される展覧会に合わせて、「対話による鑑賞」という手法を使った鑑賞サポートプログラムを行っています。キュレーターや作家による作品解説ではなく、参加者同士の対話を通して、作品と能動的に向き合い、鑑賞を深めていく手法です。

「教える／教えられる」という非対称な関係ではなく、フラットな関係の中で言葉を交わし合うことで、知識の有無によらない人と作品の出会いが生まれ、多様な作品の見方があることを体験できます。



「ことばのいばしょ」展鑑賞サポートの様子(2020年9月)

## ワークショップ等の企画・運営

さまざまな人たちと協働しながら作品鑑賞や造形をする経験を通じて、ひとりでは得られない「気づき」を創出するワークショップを企画し、実施しています。札幌市民交流プラザは多様な人が交差する場所です。普段アートに接しない方にも、人との交流や、手を動かすことを通じて、アートへの関心や親しみを持ってもらえるようなプログラムをチームで考え、実践しています。



ワークショップ「天使のぬりえ日記」の様子(2020年9月)

## ウェブでの情報発信

SCARTSアートコミュニケーターはSNSやウェブサイトを使ったアクティビティも活発です。情報発信サイト「鑑賞レポート」では、それぞれが観た展覧会やコンサートなどの感想や、アーティストへのインタビュー記事などを発信しています。あわせて、文章の基本的なテクニックを学び、専門家による添削を受ける機会も定期的に設けています。

インターネットをめぐる状況は日々変化していますが、こうした活動を通じて、そこに流通する言葉について考え、新しいコミュニケーションのかたちを探っています。



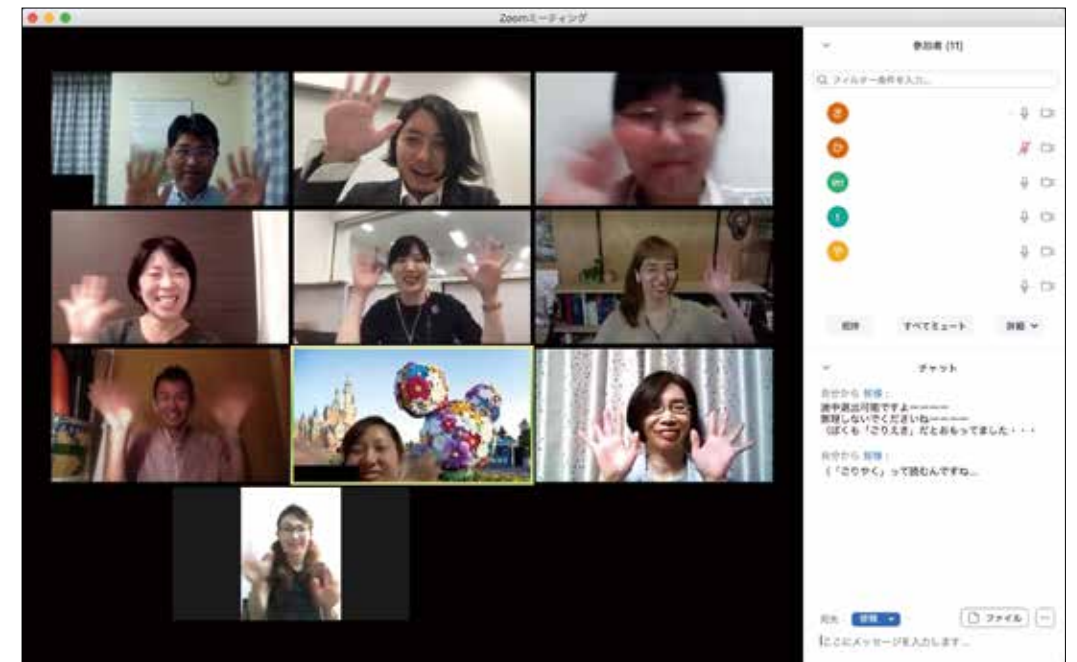
アートコミュニケーターによる発信サイト「鑑賞レポート」

## 自主企画＋勉強会

SCARTSアートコミュニケーターに参加する人々のバックグラウンドは多種多様です。それぞれの興味関心や得意なことを生かして、自主企画の立案や運営を行っています。

企画を進める条件は、「3人以上の賛同者を得てからスタートさせること」。大切にしているのは、発案者がリーダーシップをとって何かを進めることではなく、いろいろな人たちが関わることで物事に変化が生じていくプロセスです。

また、それぞれが関心のある事柄や作品について話し合う勉強会も、活発に行われています。アイデアの種を見つけ、ゆるやかに育てていくための土壌をつくり出しています。



オンラインで行われた読書会の様子

# SCARTSアートコミュニケーター 「ひらく」の活動を支えるために

## 講座

よりよいミーティングの方法、文章の書き方、「ワークショップ」についての考え方など、基礎的な知識やスキルを、みんなで話し合いながら学んでいく講座を多数用意し、月1〜2回程度開催しています。また、当初予定していなくても、メンバーの関心や要望に応じて必要な講座を新たに実施することもあります。

重視しているのは、参加者同士で話し合いをしながら学びを深めていくプロセスです。それによって知識やスキルを多角的に捉えると共に、参加者それぞれが持っている価値観や考え方のコアな部分に触れながら、お互いを知る機会を創出します。こういった取り組みが、SCARTSアートコミュニケーターの自主的な活動を支えています。

※2020年度に開催した講座についてはp.161参照



山崎正明(北翔大学教育文化学部 教授)を講師に迎えて行われた講座「作品を鑑賞するとは?」(2020年8月)

## コロナ禍の活動

不自由な状況が、転じて新しい発見をもたらすチャンスにもなり得ること。コロナ禍にあった2020年の「ひらく」の活動は、このことを強く感じさせるものでした。

空間を共にし、語り合うことで信頼関係をつくってきた「ひらく」のメンバーたちにとって、「集まらない」という状況は大きな痛手です。2020年4月からは新しく2期生を迎えましたが、この状況下でどのようにメンバー同士の関係をつくっていけばよいのか、運営スタッフも方針を定められずにいました。

しかし、「ひらく」メンバーは積極的でした。メンバー間の連絡用のウェブ掲示板には、他愛のない「雑談」をするスレッドが次々に立ち上がります。「2020年度のプチ目標、みんなで共有しませんか?」「#STAYHOME時間にオススメ 情報交換しませんか?」「面白いことしたいなあ。」といったタイトルで、たくさんの交流が生まれました。

美術作品を前にした対面での鑑賞プログラムが実施できなくなってしまった代わりに、インターネット上で見られる映像作品や、関心のある本、好きな映画など、さまざまな作品を語る会がオンライン上で開かれました。禍を転じて福と為す、それまでよりも深く作品について議論し、お互いについて知る時間をつくることができました。

そしてそれは、対外的な活動の活性化につながりました。例えば、「ひらく」の運営するウェブサイト「鑑賞レポート」(<http://ac-bbs.sapporo-community-plaza.jp/report/>)には、前年よりも多くの文章が投稿されるようになります。古い映画や書籍、パブリックアートなどを詳しく論じた文章の数々は、コロナ禍であっても、目を向ければ身近なところにも作品や表現がたくさんあることを示していました。それは、ただただ好きなものについて語り合う、ゆったりとした時間が生み出した言葉でした。

「ひらく」の本質は、「ゆるやかで小さなコミュニティ」であることです。利害関係に縛られず、顔が見える人同士によってつくられた集まりは、紐帯としては弱いものかもしれません。しかしそれは、柔軟さとしなやかさをもって状況に対応するポテンシャルを秘めていることを、強く感じさせました。

「ひらく」という愛称を決めたときに私たちは、自分たちの活動は「アートを通して人の心を開くこと、そのための方法を共に切りひらき、互いに啓きあうこと」であると宣言しました。そこには「未来に向かって動いていくこと」がイメージされています。芸術のあり方も社会のあり方も、これまでの常識がすべて通じなくなってしまったコロナ禍にあって、「ひらく」の活動は、「人と人がつながりあうこと」の価値を改めて感じさせるものになりました。